

[報文]

国土と詩論のフロンティア ーエマソン“Self-Reliance”から“Experience”への展開ー

山 本 洋 平

戸板女子短期大学国際コミュニケーション学科

1. 散文詩人Emerson

教育学者Elizabeth PeabodyはRalph Waldo Emersonの*Nature*にたいして次のように書評している。

“Nature” is a poem; but it is written in prose. The author, though “wanting the accomplishment of verse,” is a devoted child of the great Mother. (Peabody 321)

ここでPeabodyはWordsworthの*Excursion*からの一節を引用しながら(I: 77-80)、*Nature*という作品が形式上は散文でありながら表現内容は詩的であることを強調している。その意味でこの書評に“A Prose Poem”という副題が付されている事実は注目に値する。アメリカ文学史上においてprose poemといえ、近年再評価の進むボウの詩論*Eureka*の副題として有名であるし、ほぼ同時期にPeabodyが*Nature*を評してA Prose Poemと述べた事実は、いわゆるアメリカン・ルネサンスの初期にあたる1840年前後の時期の文学を考える上で示唆的であるように思われる。Emersonは詩と散文との緊張関係という文学ジャンル選択の問題を念頭において、その後の自己信頼の思想を形成していったのではないか—これが本論の問題提起のひとつである。

他方、文化史的にはこの書評の掲載媒体が重要である。発表媒体の*Democratic Review*誌といえ、1845年、Manifest Destinyという用語が打出された雑誌として知られる。その提唱者John O'Sullivanは早くも1839年に西部開拓はアメリカの天命であるとする膨張主義の考えを同雑誌に公

表していた("The Great Nation of Futurity")。言論界のあいだでアメリカの西へのまなざしが「明白な運命」という帝国主義的思想へと醸成され、国民に流布しようとするまさにその時期に、Emersonが“Self-Reliance”と、その思想的展開として位置づけられる“Experience”を書いた符合も見逃すことはできない。

この时期的な重なりは、偶然の符合というより文学的必然と考えるべきだろう。超越主義者たちにとって*Democratic Review*誌の論調はおのの執筆活動と複雑に絡み合っていた。Henry D. Thoreauがメキシコ戦争に抗議するエッセイ“Resistance to Civil Government”を*Democratic Review*創刊以来のモットーである一文、“THE BEST GOVERNMENT IS THAT WHICH GOVERNS LEAST”という引用で書き始めている事実も文学と政治の関連性の傍証となる。

Emersonが西部開拓とそれに伴う先住民排斥の問題について言及したのは、チェロキー族の強制移動を進めようとした政府に対する嘆願であった。しかし、EmersonはThoreauのように膨張主義政策を進める政府を批判するのは、例えばThoreauが*The Maine Woods*のなかで描いたように、先住民を「リアリスティックで魅力的」(Sayre 172)と見ていたような個別の関係性ないしは人種的公平性というような現代的な多文化主義的心情からくるものではない。せいぜいLucy Maddoxの述べるように、Emersonの西部開拓にたいする態度は「両義的」とするに留まる(Maddox 27)。「明白な運命」の名のもとに推進される西部開拓の背景には、購買と抗争を政治戦

略的に進める国家事業とそれに伴う産業化があり、それらを煽るマスメディアを始めとする言論界から、Emersonのような文学者も無関係ではいられなかったとするKris Fresonkeによる指摘は説得的ではある(Fresonke; 113-29)。彼の両義的な西部への眼差しは、彼は「自然」を追い求める衝動を名目として西部開拓を正当化したというMyra Jehlenの説明(Jehlen 76-122)—ポスト・コロニアリズムを経た多文化主義的批評の趨勢と呼応する。(1)

本論においても、このようなMichael Gilmoreの新歴史主義的研究によって導入された、政治・経済的イデオロギーに翻弄される近代的自己像をEmersonのうちに見る。ただし、その近代的自我からの残余にこそ、社会的な動きから屹立しようとする文学者の矜持があるのであり、まさにその残余をテキストの行間から読みとってみたい。

ここで言う「行間」とは、字義通りの意味の「行間」のことであり、Emersonら19世紀の散文作家にしばしば見られる文学形式である、エッセイの冒頭に配置されたエピグラフとそれに続く散文との構造的、内容的な（同一作家における）間テキスト性のことである。Emersonの作品におけるエピグラフは往々にして韻文であり、それに続く散文はその韻文にたいして自己言及的に解説を加える役割を請け負うという詩論としてのスタイルをもち、比喩的に言えば、Emersonのテキストは同一の作品内に、複数の自己を抱え込む（あえて言うならモダニズム風の）文学スタイルであると捉えられる。

こうした作家の創作活動と歴史的・文化史的な背景との関係を、散文と韻文との緊張関係という問題から照射することによって、1840年代から50年代におけるEmersonの政治性と文学性の理解と一助となることを本論のねらいとする。(2)

2. 揺らぐ「自己信頼」

Emersonの「自己信頼（“Self-Reliance”）」の思想はアメリカ文化の水脈にあるとするのは常識の部類であるが、この抽象概念で全ての事象を単一化するような思想や、抽象度が高いゆえに高揚

感に溢れた文体が、帝国主義に直結しかねないと捉えられ、フェミニズムや新歴史主義からは少なからず批判されてきた。しかし、本当にそうなのか、エピグラフと本文との関係に注目しつつ検討していく。

「自己信頼」のエピグラフに以下のスタンザがある。

Cast the bantling on the rocks,
Suckle him with the she-wolf's teat;
Wintered with the hawk and fox,
Power and speed be hands and feet.
(*CW*, 2:26)

想像力の源としての「子ども」はロマン主義的主題のひとつである。その「子ども」をEmersonはbantlingという野卑なイメージの単語で表現している。またその母親を“she-wolf”とすることによって、Emersonは「自己信頼」を野生的な印象で始める。さらに「子ども」に「タカとキツネ」(the hawk and fox)とともに冬を越させて、Powerを身につけさせると言う。まさしくここに自然に対峙する人間というロマン主義的な素材をアメリカ的に、すなわちウィルダネスに対峙する個人という構図に書き換えようとするEmersonの身振りをみることができる。その意味で、このエピグラフはアメリカの学者としての実践的パフォーマンスであり自己信頼のマニフェストと見てよい。

しかし、このエピグラフの直後から書き出される散文では、そうした文学表現は自己から内発的に生起するわけではなく、アメリカ的な素材、すなわち＜公＞の領域との接点を志向するものであると続けられている。

I read the other day some verses
written by an eminent painter which
were original and not conventional.
The soul always hears an admonition
in such lines, let the subject be what it
may. The sentiment they instill is of
more value than any thought they may
contain. To believe your own thought.

to believe that what is true for you in
your private heart is true for all men,
—that is genius. (CW, 2:27)

ここでまず目を引くのが、「画家」によって描かれた「韻文」の存在であり、意識的にか無意識的にか、絵画と文学という芸術ジャンルの複層化を暗示する一文で“Self-Reliance”が書き始められている点である。(3) さらに下線部においてEmersonは、自己と他者、＜私＞と＜公＞が共有する領域の存在を信じるのがgeniusであると書いている。すなわち、Emersonの自己信頼とは、第一義的としては自由意志や個人主義と概念的に重なりあうものであり、偏狭な自己肯定の思想である一方、他者の存在を経由した自己である側面がある。より簡単に言い換えれば、私が信じていることをあなたも信じよという画一的なものではない。あなたが信じているものが、私が信じているものと同じである高みまで登っていくこと—それが自己信頼だと述べている。この「高み」というのが自己信頼の原動力たるgeniusの謂いである。

そうすると、Emersonにおけるgeniusとはどのような機能を果たすのかと問いをすすめることになる。エッセイ中盤の一節を参照しよう。

The doctrine of hatred must be preached as the counteraction of the doctrine of love when that pules and whines. I shun father and mother and wife and brother, when my genius calls me. I would write on the lintels of the door-post, *Whim*. (CW, 2:30)

ここでの*Whim*という態度（「気まぐれ」とでも訳しておこう）についてLawrence Buellは「焦点を変化させたり、直観的に飛躍したり、自分自身による発言を撤回したりする」身振りである。この「気まぐれ」の思想こそがEmersonのテキストの特徴的パフォーマンスであると指摘している(Buell 68)。また哲学者Stanley Cavellはこの「気まぐれ」の態度について「放棄の思想(idea of

abandonment)」と関連づけて、Emersonのなかの宗教的「熱狂」と（ニューイングランドの地域的な特徴とされる）「自己忘却」という両輪と共鳴するものと述べている(Cavell 137)。つまり、このテキストは、忘我を志向することと自己を信頼することが同時に志向されているのだ。

このような、自己を信頼するために自己を忘却するという逆説的思想は、＜私＞と＜公＞の境界を自己の思い込みで消去するという論理を採れば矛盾した思想ではない。だとするならば、Emersonの自己信頼の思想は、自己の立ち位置を中心的に考え、自らの領域の論理の拡大を正当化する帝国主義的な衝動とすぐれて整合性のとれたものとなる。

だが、“Self-Reliance”の締めくくりを精読すると、Emersonの自己は、逆説を内部で完結させるような強固なものではなく、外部との交渉によって揺らぐ、他律的な自己である可能性が浮上するのだ。

A political victory, a rise of rents, the recovery of your sick, or the return of your absent friend, or some other favorable event, raises your spirits, and you think good days are preparing for you. Do not believe it. Nothing can bring you peace but yourself. Nothing can bring you peace but the triumph of principles. (CW, 2:50-51)

ここでは、victoryから、rents, sick, absent friend, favorable eventなど、カタログ的に並べられた名詞群がDo not believe itとしてすべて却下され、それ以後、Nothingという否定後を主語とする構文が繰り返されてこのエッセイは終わる。信頼を寄せるべきものとして、yourselfとthe triumph of principlesが際立たされた断言調のコードである。

表面的には断言調で締めくくられているとしても、執筆過程においては必ずしもそうではなかった。パラグラフの冒頭における下線部A political victoryを日記での該当箇所と対照させると、元々

はA whig victoryとなっていた事実が判明する(JMN, 7:145)。ここでEmersonが連邦主義的なWhig党に苦い眼差しを向けていた事実を思い出しておいてもよい。(4) つまりエマソンは、エッセイ“Self-reliance”を書き終えるにあたり、whigではなく、politicalと濁すことによって、連邦主義か州権論かの判断を留保したと考えることができる。“Self-Reliance”の終結部は、自己信頼の思想を明示的に示す一方、アメリカ膨張主義への政治的態度を留保せざるを得なかったEmersonの深層心理が読みとれるかもしれない。

ただし“Self-Reliance”におけるエピグラフと散文との連続性はゆるやかなレベルに留まると言わざるをえず、その後の散文を駆動させる、言わばダイナモとしての役割を果たしているとは言えない。また書物の構成という観点からみれば、“Self-Reliance”におけるエピグラフは、扉ページと次のページに一つずつ、計ふたつの韻文を配置するというEmersonがしばしば採用する形式であるが、ここでは例外的に、第一のエピグラフに英国の劇作家BeaumontとFletcherの引用が用いられ、第二のエピグラフに自作の韻文が配置されている。Emersonのその後のエピグラフが自作の詩の組み合わせで作られていることを考慮するなら、この事実が意味するのは、“Self-Reliance”執筆時点でのEmersonは引用と自作／伝統と個性がまさにページの表と裏の関係にあったということである。つまり、彼がアメリカ独自の文学形式にたいして絶対の信頼をおききることができず、韻文と散文が引き裂かれるエピグラフの構造そのものが自己を疑う視線を内面化していたと考えられる。

3. “Experience”における詩と散文の再構築

“Self-Reliance”において、「内面は時間がたてば外面となる」(the inmost in due time becomes the outmost)と述べていたEmersonは、揺らぐ自己信頼の思想と、南北戦争に向かうアメリカの政治的道行きの「揺らぎ」とがどのように止揚されるかという問題に直面していた(CW, 2:27)。そこで、個人と国家という関係に加えて、個人と家族とい

う関係もここで考慮に入れて検討しよう。

1842年に息子Waldoが5才で死ぬという出来事に直面したEmersonは、さらにもう一つの〈私〉と〈公〉の問題に直面することになる。個人と国家という対立項に、個人と家族の関係がその緩衝材として描かれたのが、“Self-Reliance”の「中間報告(Interim Report on an Experiment in Self-Reliance)」報告(Whicher 111)と位置づけられる“Experience”である。

前項と同様に、このエッセイに掲げられたエピグラフと散文との関係に焦点を絞りながら見てみよう。少し長いが議論の必要上、“Experience”のエピグラフの全文を引用する。

The lords of life, the lords of life,—
I saw them pass,
In their own guise,
Like and unlike,
Portly and grim,

Use and Surprise,
Surface and Dream,
Succession swift, and spectral Wrong,
Temperament without a tongue,
And the inventor of the game
Omnipresent without name;—
Some to see, some to be guessed,
They marched from east to west:
Little man, least of all,
Among the legs of his guardians
tall,
Walked about with puzzled look: --
Him by the hand dear nature took;
Dearest nature, strong and kind,
Whispered, ‘Darling, never mind!
Tomorrow they will wear another
face,
The founder thou! these are thy race!’

(CW, 3:25)

前半11行目までをパラフレーズしてみると、「習慣や驚き、表層や夢想、連続性、気質、遊びの発明家」、これら「生活の主たち」が通り過ぎていく。後半部分を訳してみると、「それらは見える

ものもあれば、推し量られるものもある／それらは東から西へと行進していく。／とりわけ小さいコビトが、ずいぶん背の高い守護者の足の間を／困惑した表情で歩きまわった。／新愛なる自然が彼の手にふれ、／強く思いやりのある最愛の自然がこうささやく／「愛しの者、気にするな／明日にはそれらは他の顔をしているだろう。／創始者があなたに呼びかけている！これらはあなたの人種なのだ！」となる。

この詩を解説するうえで鍵となるのは、冒頭部分の「生活の主たち(The lords of life)」とは何であるかという問いであろう。散文の中にこの詩の内容と対応する一節がある。比較してみよう。

Illusion, Temperament, Succession, Surface, Surprise, Reality, Subjectiveness, -- these are threads on the loom of time, these are the lords of life. I dare not assume to give their order, but I name them as I find them in my way. I know better than to claim any completeness for my picture. I am a fragment, and this is a fragment of me. I can very confidently announce one or another law, which throws itself into relief and form, but I am too young yet by some ages to compile a code. (CW, 3:47)

この引用文が、先の冒頭のエピグラフと密接な関係にあることは一見してわかる。しかし必ずしも相似形になっているわけではない。この点をめぐってStephan Whicherは7つ並べられたthe lords of lifeのうち最初の4つは、「内なる神聖な力」(the power of the divine within the soul)を貶めるものと指摘し、制御不能なこれらの条件をsurpriseとRealityが打破すると指摘している(111)。他方、Sharon Cameronはエピグラフで提示された主題群が散文で適切に解説されていない点を重視して、Emersonの「分裂(Dissociation)」状態を読みこむ。Cameronは韻文と散文の双方で言及される“the lords of life”という主題はあくまで見せかけであり、周縁／余白

へ追いやられた息子を失った悲しみこそが“Experience”における真の主題であると結論する。なるほど、脱構築批評と精神分析的批評を接合する伝記的アプローチによるこの指摘は説得的であるし、確かに韻文と散文を比べた場合the lords of lifeとして並べられた抽象名詞はその数も順番も合致するわけではなく、ある種の「気まぐれ」による自己言及という側面は否定できない。

事実、Emersonは「序列を与えようとは思わないが、自分なりに見出されるまま名前をつけていく」と続けており、韻文と散文との不一致には自覚的であった。IllusionからSubjectivenessへと並べ換えられているのは、生活上の「経験」における信頼の度合いの低いもの、表面的で無価値なものから信頼に足るものへの論理的序列になっていると考えられ、散文的特質を見ることができものの、そこに格別の意味性を付与しようとする意図はなかったのかもしれない。

他方、カプレットが基本のSecond Seriesの詩群にあって、このエピグラフは例外的に行数が奇数であり、韻律も非対称である点に意味性を読みとるならば、形式の欠落に不在や沈黙といった心情を語らせている可能性がある。端的に言えば、息子を失った喪失感である。このきわめて個人的な＜私＞の領域の「経験」が、＜公＞の領域で承認されるのか否か。この問いを発することが、図らずも、自己信頼(を支えるgeniusの機能)を考えるという喫緊の課題と直結するものとなり、揺らぐ自己を見つめなおす契機ともなった。したがって、geniusは次のように言い換えられることになる。

Never mind the ridicule, never mind the defeat: up again, old heart! -- it seems to say, -- there is victory yet for all justice; and the true romance which the world exists to realize, will be the transformation of genius into practical power. (CW, 3:48-49)

ここでの第一文は、先に引用したエピグラフ19行目と対応している。前節で見たように、geniusは<私>と<公>の共通領域の存在を信じさせる力であった。“Experience”においては、geniusは「現実的な力」へと「変容」するものであり、それを成し遂げるものがthe true romanceであると言う。果たしてtrue romanceとは何か。エッセイの文脈を遡って補うなら、Emersonは当時計画が進みつつあった実験共同体Brook Farmを暗に批判しており、Brook Farmのようなコミュニティに限界を見ている。つまり、ここでのthe true romanceとは、そのような限定的コミュニティとは対比的な関係にあり、「ロマンス」でありながら「実践的な力」へと向かうことが可能な、両義的な領域を想定していた。この両義的なスペースは、まさに、「明白な運命」下にありながら、明白ならざる道行きを示していたアメリカに直結したとしても不思議ではない。

この解釈にたいする傍証として、このエピグラフの創作プロセスを1844年6月前後の日記での下書きが挙げられる。⁽⁵⁾ エピグラフ13行目のThey marched from east to westは、元々日記の記述ではなくのちに書き加えられた。前の行のguessをguessedに変更して、その脚韻としてwestという語を引き込んでいる。日記という<私>の領域から、出版という<公>の領域へ詩を再編成するさいに、図らずもwestという語を詩に引き込んでいる点に、Emersonが「西部」を意識していたことが読みとれるのである。

そう考えてくると、家族の死という個人的な喪失を埋め合わせる衝動と連動するものとして、Emersonの西部への眼差しを捉えるならば、それは暴力的な排他性というより博愛的な包括性として立ち現れるはずである。

4. 国土と詩論のフロンティア

ここまでの議論をひとまず要約すると、*First Series*の“Self-Reliance”における揺らぐ自己は、表面的には挑戦的、批判的なトーンで覆われていたが、*Second Series*における“Experience”では、非挑戦的、自己批判的なものへと自己が変容す

る。それは、個人と国家で揺らぐ自己が、家族の死をきっかけとして露呈したものである。その揺らぐ自己像を、韻文と散文との緊密度という観点から分析してきた。“Self-Reliance”から“Experience”への展開は、断裂的なものから有機的なものへの移行である。あえて図式的に言うなら、思想的には、自己信頼から自己の揺らぎへと疑念を深めてはいるものの、それとは対照的に、韻文と散文の役割分担という文学ジャンル選択の問題に関しては、疑念が自信へと解消されている。

ここで、歴史と文学との問題を深めてみたい。すなわち、揺らぐ国境線と信頼を深める詩論とが、Emersonのなかでどのように解消されたのか。あるいは、矛盾するがゆえに思考を深める力となりえたのか。自己の揺らぎと、文学ジャンルの確信という、矛盾する要素を含むEmersonのテクストは、膨張主義下のアメリカの運命の明度とどのように対応するのか。

1851年に“The Fugitive Slave Law”で奴隷制反対を明言するEmersonは、そこから約10年前のこの時点で、どのような政治的立場であったのか。*Second Series*の“Experience”の直前に置かれたエッセイ、“The Poet”に次のような記述がある。

Our logrolling, our stumps and their politics, our fisheries, our Negroes, and Indians, our boasts, and our repudiations, the wrath of rogues, and the pusillanimity of honest men, the northern trade, the southern planting, the western clearing, Oregon, and Texas, are yet unsung. Yet America is a poem in our eyes; its ample geography dazzles the imagination, and it will not wait long for metres. (*CW*, 3:22)

ここでEmersonはフロンティアが西へと動いていくたびに問題となる黒人奴隷、および消えゆく運命として犠牲になるインディアンを「私たちのもの」と述べる。この時点でのEmersonは、西部開拓にともなう帝国主義的な側面や南北戦争前夜の火種を察知していながら、“politics”は他人事であ

ると述べている。ここに、Emersonの楽観主義的ナショナリストたる文学者像を読みとることは容易であろう。ただし、ここでの表現、「アメリカは私たちの眼には一片の詩である」の一文は、きわめて両義的である。なぜならば、アメリカという「公」の領域を「詩」という「私」の領域と重ね合わせ、なおかつその方程式を「私たちの眼」によって共有されていると述べられている。このEmersonの「眼」と言えば、当然、*Nature*の最も有名な一文、I become a transparent eye-ball(CW, 3: 97)、「私はひとつの透明な眼球となる」を想起させる。これを“Experience”の America is a poem in our eyesと並置して考えてみるならば、*Nature*における「ひとつの眼球」は、他から屹立しながらも境界を失する一人称の“I”であり、“Experience”においては、＜私＞と＜公＞の境界を想定しつつも、geniusによって止揚された“our eyes”から見た世界をEmersonは志向している。

アメリカが一片の詩に映ずる、換言すれば、＜私＞が＜私たち＞となるという構図は、政治ではなく詩的想像力としてのgeniusこそが必要であるとEmersonは考えていた。その意味で、Emersonのテキストを評言するうえで、冒頭で引用したPeabodyによる「散文詩」という評言は、その文学形式のみならず、Emersonの文学性の本質にせまる形容である。かのツヴェタン・トドロフは「散文詩」という言説のジャンルについて、名称そのものが前提とする“oxymoronic label”を重要な要素としている(60)。つまり矛盾する要素が同時に成立するジャンルこそが「散文詩」とあると言うのだが、Emersonのテキストは、まさに、撞着語法的な二重性をもち弁証法的に絶え間なく変化する自己、「散文詩」的な二重性や矛盾に引き裂かれる自己を引き受けるという点において、「散文詩」的であると言えるだろう。

Emersonの文学のオキシモロニックな様態は理念と実体とがつけねに引き裂かれては統合される連邦国家と対応し、オキシモロニックな表現を好むアメリカ・ロマン主義詩学に影を落としている。アメリカという題材は、韻律を整えるのを待つよ

り以前に、すでに詩であると述べるEmersonの詩論は、約15年後に花開くいわゆるアメリカン・ルネサンスの詩人たち、とりわけThoreauの韻文・散文入り乱れるnature writingやWhitmanの口語自由詩への思想的基盤になったと考えられる。その意味でPeabodyの使用した何気ないフレーズである“A Prose Poem”は、韻文と散文とが互いに拮抗し洗練しあうEmersonの詩学を特徴づけるのにふさわしい文学批評の用語となるだろう。

のみならず、そこには詩という、自己から内発的にうたわれる言葉の連なりであるジャンルと、散文という他者を意識したジャンルとの関係が、ときに拮抗関係として、ときに補完関係として機能しつつ、同時に、個人と国家という社会背景をも包含するかのような影響力をもつものと、Emersonは考えていた。しかし、Emersonは、Thoreauのように国家にたいして不服従を表明するわけではない。むしろ、詩と散文が共鳴し合う瞬間を求めるのと同じ方向性、すなわち、geniusが止揚する＜私＞と＜公＞が交錯する領域の存在を信じようとしていた点にこそ、Emersonの自己信頼の本質がある。他者と対峙するのではなく、それとの関係を調整し折り合おうとする志向性。その自己の揺らぎを経由した自己信頼のありようは、まさに、西進する国土と文学ジャンルの混成という、互いの「フロンティア」の揺らぎと同時に生起している点に、Emersonの思想の核がある。

Notes

- 1) 他方、Anita Pattersonが指摘するように、Emersonの態度は、“contradiction”や“double consciousness”を特徴とした曖昧性の政治学とでも呼ぶべき側面をもっており、市民的不服従や非暴力思想を継承するMartin Luther Kingへの影響が(Thoreauからのみならず) Emersonからより濃厚に汲みとれる。この点を強調することによって、単純化されすぎたエリート主義的ひいては帝国主義的なEmerson像を柔和させようとするPattersonのような評者による努力も一方では脈々と続けられている。
- 2) “Self-Reliance”と“Experience”はそれぞれ、*Essays* (1841)、*Essays: Second Series*(1844)の二番目に置かれており、“History”と“The Poet”の次に位置している。つま

り、それぞれが歴史と詩論とに濃厚な関係性を暗示しているといえることができる。

- 3) An eminent painter”についてエマソンの次男 Edward は、アメリカ最初のロマン主義画家 Washington Allston か William Blake を指すのではと推測している。(Essays: First Series. Boston: Houghton, 1904. 39)
- 4) エマソンと歴史的背景、とりわけ政治・経済事情との関連について、Wesley Mott を参照。エマソンは州権論の思想を掲げる Jacksonian democracy に親近感を感じてはいたが、各州法銀行の判断ミスが引き起こした信用ブームと結果としての不況には厳しい視線を送っていたと考えられる。事実、1833 年に連邦政府と北部大資本を媒介する第二合衆国銀行の政府預金が、州法銀行へと委譲されると、過剰な信用ブームを生み出し、その結果インフレが発生した。同様の指摘として Michael Gilmore を参照。1837 年の経済恐慌に際してエマソンは金融資本よりも土地に信用を置いていたが、いったん土地が不動産として投機的要素をもつことが判明すると、手のひらを返すようにして土地へ冷ややかな眼差しを向けるようになり、やがては、信頼できるものは自己しかないという思想へといたったと説明される。
- 5) 日記の記述は以下である。
S...to see some to guess/And [1 w] omnipresent without name Poor man [1 w] walked/Among the [1 w] of his high guardians/With [1 w] puzzled look Dear nature [2-3 w] the hand [1 w]/& said, My darling, never mind [1 w]/Tomorrow they will [1 w] new faces (JMN, 9:114-15)

Works Cited

- Buell, Lawrence. *Emerson*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 2003.
- Cameron, Sharon. "Representing Grief: Emerson's 'Experience'." *Representations* 15 (1986): 15-41.
- Cavell Stanley. *The Senses of Walden*. Chicago: U of Chicago P, 1992.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Alfred R. Ferguson et al. 5vols. to date. Cambridge, Belknap Press of Harvard UP, 1971-
- . *Essays: First Series*. Boston: Houghton, 1904.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Ed. William Gilman et al. 16vols. Cambridge, Belknap Press of Harvard UP, 1960-82.
- Fresonke, Kris. *West of Emerson: The Design of Manifest Destiny*. Berkeley: U of California P, 2003.
- Gilmore, Michael T. *American Romanticism and the Marketplace*. Chicago: University of Chicago Press, 1985.
- Jehlen, Myra. *American Incarnation: The Individual, the Nation, and the Continent*. Cambridge: Harvard UP, 1986.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. London: Oxford UP, 1941.
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs*. New York: Oxford UP, 1991.
- Mott, Wesley T. "'The Age of the First Person Singular': Emerson and Individualism." Ed. Joel Myerson. *A Historical Guide to Ralph Waldo Emerson*. New York: Oxford UP, 2000.
- Newfield, Christopher. *The Emerson Effect: Individualism and Submission in America*. Chicago: University of Chicago Press, 1996.
- O'Sullivan, John. "Annexation." *United States Democratic Review* 17 (1845): 5-10. *Making of America*. Ed. Cornell University. 1 Nov 2008 <<http://cdl.library.cornell.edu/moa/browse/journals/usde.html>>.
- . "The Great Nation of Futurity." *The Great Nation of Futurity*, *The United States Democratic Review* 23 (1839): 426-30. *Making of America*. Ed. Cornell University. 1 Nov 2008 <<http://cdl.library.cornell.edu/moa/browse/journals/usde.html>>.
- Patterson, Anita. *From Emerson to King: Democracy, Race and the Politics of Protest*. New York: Oxford UP, 1997.
- Peabody, Elizabeth Palmer. "Nature—A Prose Poem." *The United States Democratic Review* 3 (1838): 319-29. *Making of America*. Ed. Cornell University. 1 Nov 2008 <<http://cdl.library.cornell.edu/moa/browse/journals/usde.html>>.
- Poe, Edgar Allan. "Exordium." *Graham's Magazine*, 842, 68-69 Ed. The Edgar Allan Poe Society of Baltimore 1 Nov 2008 <<http://www.eapoe.org/works/essays/exordm.htm>>
- Porte, Joel, and Sandra Morris. *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Rusk, Ralph L. *The Life of Ralph Waldo Emerson*. New York: Columbia UP, 1949.

- Thoreau, Henry David. *The Maine Woods*. Ed. Moldenhauer, Joseph J. Princeton: Princeton UP, 1973.
- . *Reform Papers*. Ed. Wendell Glick. Princeton: Princeton UP, 1973.
- Todorov, Tzvetan. *Genres in Discourse*. Trans. Catherine Porter. Cambridge: Cambridge UP, 1990.
- Whicher, Stephen E. *Freedom and Fate; An Inner Life of Ralph Waldo Emerson*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1953.
- Wordsworth, William. *The Poetical Works of William Wordsworth V*. Ed. E. De Selincourt and Helen Darbishire. Oxford: The Clarendon, 1949.